

「活力」

授業でも授業以外の活動でも、主体的に取り組む子どもからは活力を感じます。「活力」のプログラムでは、子どもが主体的、自発的に活動に取り組めるようになることに焦点を当て、三つのステップを紹介します。「感じて、動き出す」から「動き出して、ぶつかる（主張し合う）」、さらに「ぶつかって（主張し合って）、高め合う」です。

	Hop 【感じて、動き出す】	Step 【動き出して、ぶつかる（主張し合う）】	Jump 【ぶつかって（主張し合って）、高め合う】
	<p>子どもは心に感じていることを、言葉や身体などで表現できていますか。</p> <p>ここでは、自分が感じたことを外に向かって表現することを「動き出す」としてします。そのためには、授業でも行事等でも、個々が目的をもつことが必要です。そして、目的をもつことと同じくらい大切なのは、「動き出す」ことを受け止めてもらえる安心感のある人間関係です。聞いてもらってうれしい、もっと聞いてほしい、もっと言いたい、とお互いに思えるような人間関係づくりをしていきましょう。</p>	<p>「ぶつかる」とは、共通の目的をもって「動き出そう」としたときに、他者の考え方と自分の考え方との違いを感じても安易に同調せず意思表示をすること、と定義します。共通の目的がなければ「ぶつかる」ことはありません。また、発言することだけが主張することではないと考えます。「ぶつかる」ことで、自分の気持ちや他者の気持ちに改めて気付くことがあります。問題解決や目的達成のために、対立を恐れずに主張し合える人間関係を築いていきましょう。</p>	<p>授業や行事でも、教員の大まかな指示で、子どもが自分たちで活動計画を立てて活動ができている。このような状態から、更に一步上を目指した集団づくりをしていきませんか。教員が、子どもをどう育てたいかという意識や目的をもって、子どもが主役となるように活動を支え、ある時には活動に介入し働き掛けることが必要です。子どもから「この活動をやってもいいですか」という発言が出てくるような集団を目指しましょう。</p>
<p>教員の働き掛け</p>	<p>①子どもが考えたいような、活動したいような問い掛けや指示など、「動き出す」ための意図的な働き掛けをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業では子どもの身近なものを題材にして「なぜ？」と思わせる導入をする。 ・行事等では、なかなかうまく進まないときに、「どうしたいのか？」と問い掛ける。目的をもたせる働き掛けを行い、話合いのチャンスを逃さない。 <p>②子どもに対して、授業の見通しや時間の使い方、子どもが自由に活動できる範囲（時間内容）などを明確に示すことで、授業や活動に対して見通しをもたせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業では、「みんなの考えを必ず聞きます」など、指示や発問を他人事としない構えをつくることも初期の段階では必要となる。 <p>③教員が、子どものつぶやきや反応などを見逃さずに受け止める。ほめるときは、タイミングを逃さずその場でほめる。必要だと思えば、その場で全体に投げ掛ける。</p>	<p>①授業や行事等だけでなく日常の学校生活の場面でも、「動き出す」「ぶつかる」ことを否定しないで大切なことだと価値付ける。また、授業や行事等の話合いの場面で子どもが気付いていない視点や異なる考え方などを、教員側から問い掛ける。</p> <p>②「動き出す」ための聴き方ができるように、問い掛けや指示の仕方、伝え方を日常的に継続していく。また、子どもから出てくる発言（意見、疑問、気付き等）を見逃さずに受けとめ全体で共有し考えていくことや、話合いの後には「ぶつかる」ことの楽しさを味わえる振り返りの機会の設定を継続して行う。</p> <p>③自分が良ければいい、というような攻撃的な表現の仕方ではなく、自分も相手も大事にするというアサーションの考え方を意識させる。</p>	<p>①子どもに任せる部分を明確に示し、活動を見守る。子どもがぶつかって出した答えや行動を簡単に受け入れず、その理由や根拠を問い直し確認する。意図的に「壁」のような存在となる。活動後にもより高みを目指すような目標を示す。</p> <p>②活動の途中でも、できている部分をお互いに肯定的に認め合う場を設定し、子どもの自己肯定感を高める。</p> <p>③教員が日常的に子どもに対して個別の声掛けをする。集団に対し何かしたいと考えている子どもを後押しするような助言や言葉を掛けをしたり、目標を示したり、会話の中で気付かせたりして、それを学級や集団の場でできるようにしていく。</p>
<p>指導のポイント</p>	<p>①うまくできないときには、すぐに助言をするのではなく、子ども自身に考えさせ、気付かせ、次の一步を踏み出せるようにするような働き掛けをする。</p> <p>②授業でも行事等でも、活動のねらい、話合いの時間、自分で決められること等を明確に示し、「動き出す」ことを支援する。一方的に事実を伝えるだけでなく、気持ちや考えを聞いたりする話の進め方を意識する。また、初期ではやらざるを得なくなるような設定づくりを行う。強制にならないように留意する。</p> <p>③全体のために価値のあるつぶやきや反応を見逃さないためにも、常に児童生徒の言動に気を配り、タイムリーに対応することを心掛ける。</p>	<p>①つぶやきであっても、共通の目的のもとに他者のために働き掛けようとする考えがあるのは意味があると考える。「動き出す」状態を大事なことであると価値付け、次に、相手や集団のために何ができるか、どうすればよいかなど全体に広げ問い掛けることもできる。また、対立意見やそれまでの結論とは違う考え方を引き出すための問い掛けを行うことで「ぶつかる」状態を作り出し、子どもに体験させることもできる。</p> <p>②話合いや活動後の振り返り（シェアリング）は、子どもが安心して自分の気持ちや考え、気付いたことなどを交流することで人間関係を和やかなものにする効果もあるため確実に行いたい。</p> <p>③攻撃的な表現をしている子どもに対しては、自分も相手も大切にするという考え方を伝えていきたい。学級全体で、静岡県版「人間関係づくりプログラム」の「自分も相手も大切に自己表現」の内容について学ばせておくのもよい。</p>	<p>①子どもが自身で活動を見直せるような質問や意見を出す。答えが出ればよいのではなく、答えを出す過程を問い直し、「ぶつかる」方法や内容についても改善を促す。ただ突き放すのではなく、良い点は褒めたり承認したりして、見通しをもって行う。</p> <p>②活動を全て子どもに任せるのではなく、教員は常に状況を把握し、必要な場面で集団の問題として考える機会を設定する。また、目の前の問題解決ができれば良いのではなく、活動の目的、集団としての目標など、子どもだけでは考えにくいことは教員が示す。子どもが実感し、気付いたら、褒めたり認めたりし、次の活動へつなげる。</p> <p>③全体の場で表現することが得意ではない子どもには教員が個々に働き掛ける。日常の会話の中でその子どもの良さを認めたり、「いい考えだからぜひ全体に言ってみよう」など励ましたり、「こんな方法で提案してみよう」と助言を行ったりする。</p>
<p>期待できる効果（子どもの変容）</p>	<p>○おもしろい、考えようという意欲が湧き、何をどれくらいやればよいか理解することにより、活動が能動的になる。</p> <p>○「自分だったら」という意識をもって話を聴くことができるようになる。</p> <p>○受容される体験を通して、「動き出す」ことの安心感が得られ、自己肯定感が高まる。聴いてもらってうれしい、もっと聴いてほしい、もっと話したい、と思うようになる。</p>	<p>○「ぶつかる」ことの大切さを理解し、互いに主張し合うことが様々な場面に広がる。</p> <p>○自分も相手も大切にすることをもち、表現しようとする。</p> <p>○自分のことや相手のことが分かる、問題解決につながる、人間関係が良くなるなどの「ぶつかる」ことの良さに気づき、次も臆せず表現しようという気持ちになる。</p>	<p>○もっと良い解決、もっと良い答えがないかを探すようになる。</p> <p>○自分たちの活動に自信と誇りをもって取り組めるようになる。集団としての質やモチベーションが更に高まる。</p> <p>○自分たち自身で目標をもって活動を進め、より良いものにしていくようになる。</p>